

そう思いつつ目が重くなって来た

つぎに、僕の宗教感についての作文の構想。こちらは、少々長い、一大論文、以下その概略。

僕は暗い教会で一人静かに座り黙想するのが好きだ。キリストは神であると学んだ。僕はキリストに会った事はない。ただ、人から聞くだけ。多くの人がキリストが神であると信じている。時々、ふと疑問を感じる。「キリストはどの様にして、自分が神である事を証明したのだろうか。キリストは本当に神なのか。」と。「何回となく、奇跡を行ったと。」と人は言う。しかし、それは科学的、理論的な知識の全くなかった、今から見れば、幼稚な古い昔の事。それが真実だと、どうして証明出来よう。人の言い伝え、記録書など当てに思わない。ただ、キリストも普通の人間だったろうと否定する事も、キリストが神だと断定する事も、それを否定する事も、僕には出来ない。昔、雷は、当時の人々にとって、不可思議な、大変恐ろしいものである。「なぜ、雷が鳴るんだらう。」と不思議そうに、その理由を考えているうちに、昔の人は、それなりに、「雲の上で鬼が腹を立てて、太鼓をたたいている。」と、「一応な理由をつくり出し、それにより、自分達の、この一つの真理探究の欲望を満足させていた。これは良い例ではないかも知れないが、僕の言いたい事は昔から人間には理由、原因を知ろうとする欲望があり、何かにつけて、不思議な事にぶつかると、その理由、原因を無理にでも作り出して、理解しようとする性質があることである。その一番良い例を挙げられるのは神の観念であると思われる。「なぜ、僕は生まれて来たのかだ。なぜ、互いに愛し合わねばならぬの

